

令和七年九月度 御報恩御講

祈禱抄

月を待つまでは灯を憑むべし。宝珠のなき処には金銀も宝なり。白鳥の恩をば黒鳥に報ずべし。聖僧の恩をば凡僧に報ずべし。とくとく利生をさづけ給へと強盛に申すならば、いかでか祈りのかなはざるべき。

六三〇頁

本抄は、文永九（一二七二）年、日蓮大聖人御年五十一歳の時に佐渡において認められ、最蓮房に与えられた御消息であります。その対告衆の最蓮房はかつて天台宗・比叡山延暦寺で修学に励んだ学僧でしたが、その後佐渡において大聖人様の弟子となり、重要な法門書を賜った人物です。本抄は最蓮房の質問に対するお答えのお手紙です。

初めに法華經による祈りこそ真の祈りになると言われています。即ち、華嚴宗・法相宗・三論宗・小乗の三宗・真言宗・天台宗などの諸宗による祈りは叶うのかとの問いを設けられて、真の祈りは法華經に限り、法華經の祈りだけが必ず叶うことを説示されているのであります。

次に、爾前權經において成仏できなかった声聞・緣覺の二乗が、法華經によって成仏できたことから、その大恩によって法華守護を誓った声聞・緣覺の二乗が法華經を行ずる者を必ず守護することを挙げられているのであります。

即ち、一切の菩薩や凡夫が成仏できたのも、ひとえに法華經の恩徳によるのであり、また釈尊が九横の難を乗り越えて説かれた教えであるから、法華經を行ずる者を必ず守護するので、法華經の行者の祈りが叶わないはずがないと示されているのであります。

また、法華經の会座において、諸々の菩薩は初めて成仏が叶い、また諸々の天人も法華經の行者を守護するとの誓いを立てていることから、法華經の行者は諸菩薩や諸天善神による守護は必定であり、その祈りが叶わないことがないと明かされているのです。

そして、法華經の会座において即身成仏を遂げた竜女自身が「苦の衆生を度脱せん」と誓ったことから、深い御恩のある法華經の行者を守護しないわけがないと示され、

さらに竜王をはじめ一切の竜などの畜類も法華經の行者を守護することを説かれているのであります。或いは又、釈尊の在世にその弟子になりながら退転して、三逆罪（釈尊の従弟で、最初は釈尊に従って出家したが、慢心を起こして敵対し、釈尊に種々の危害を加えたり教団の分裂を企てた。三逆罪とは破和合僧・出仏身血・殺阿羅漢の三つを言う）を犯して無間地獄に堕ちた提婆達多も、法華經で成仏を許されたのだから、法華經の行者を守護するはずである」と述べられて、諸々の菩薩も法華經の行者を守護するはずであることを明かされているのであります。

更に、諸仏・菩薩や二乗・天・人などの衆生にとって、釈尊は主・師・親の三徳を具えた方であり、その釈尊に法華經によって祈りが叶わないわけはないとされ、大地はささばはづるるとも、虚空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬ事はありとも日は西よ

り出づるとも、法華經の行者の祈りのかなはぬ事はあるべからず」と述べられて、強盛に祈るならば必ず叶うと教えられているのであります。

しかし、法華經の行者の祈りは叶うが、逆に、天台・真言の僧達の祈りは叶わないばかりか、例えば、承久の乱の際の幕府調伏の祈禱が朝廷側の敗北を招いた事実を明かされて、その原因は真言の大惡法で祈禱したためであり、弘法が立てた惡法の真言の立義がいかに仏説に背き、道理に外れているかを示されているのであります。

更に又、当時の権力者たちが真言・禪・念仏等によって祈っていることを取り上げられて破折なされ、慈覺大師が本師・伝教大師に背いて真言密教（ここでは、弘法大師の邪義慈覺・智証の二人が天台宗に取り入れてしまったために、弘法の僻見が日本国中に広まっていったことを指摘されているのです）比叡山の祈りが叶わないとの理由を示され、正法による祈りこそ国土に安穩を招き、成仏の直道となることを教えられているのであります。

大聖人様は佐渡配流以後、特に身延期において、天台密教（台密）の慈覺・智証が主張した理同事勝の邪義を破折の対象とされますが、当抄の後半に、比叡山を密教化した慈覺が開山の伝教大師に背いたことを指摘されていることから、本抄は佐後における台密破折の嚆矢（物事の始まり）や先駆け」という意味と拝されます。

爾前經では妙覺の法門が説かれず、一仏乗を果分とする法門を説いた法華經により妙覺の極果に登ることができた菩薩が重ねて法華經の行者を守護すると述べられます。

また、諸仏・菩薩や二乗・人天などの衆生にとって釈尊は、主師親の三徳を具えた方であり、その釈尊によってこれらの衆生は成仏が叶い、法華經のために身命を惜しまないと誓ったのであるから、末法の法華經の行者の祈りが叶わないことは絶対にないことを示され、強盛な信心を勧められているのであります。

次いで、その真言の邪法たる理由について触れられ、弘法空海が立てた 第二日經、第二華嚴經、第三法華經」との法華經を第三の劣と見下す立義が、經典には根拠のない我意我見であることを指摘なされ、いかに弘法の説が、法師品』に説かれる 法華最第二の仏説に背く道理に外れた邪義であるかを摘示されているのであります。

最後に、大聖人様は、当時の権力者たちが真言や禪・念仏などに頼って祈る間違いを指摘なされ、慈覺が伝教大師の法華最第一に背いて、比叡山に真言を弘めようと祈禱した際、日輪を射て動転させたという夢想は、まさに忌むべき身を滅ぼす夢であると破折されて、本抄を締め括られているのであります。

大聖人様は本抄において、華嚴宗や天台宗などの祈りで靈驗（神仏による効験が明らかに表れるさま）を現わすことができるのであろうかとの問いを設けられて、それは釈尊出世の本懷である法華經の祈りのみが所願を成就する真実の祈りとなると答えられました。特に法華經によって成仏を遂げた一切の仏菩薩、二乗や竜女・提婆達多等が法華經の行者を守護することを誓ったこともあり、その擁護（危害を受けることから守られこと）により必ず祈りが成就することを説示されています。

そして、法華經の行者の祈りが叶わないことはないとのことを、たとえ大地を指してそれが外れることがあったとしても、また大空を繋ぐ者がいたとしても、海の干満がなくなつたとしても、さらには太陽が西から昇ることになつたとしても、祈りが叶わないことは絶対のないとの譬えをもつて仰せられているのであります。

されば、日寛上人の觀心本尊抄文段 御書文段・一八九頁に、此の本尊の功德、無量無辺にして廣大深遠の妙用有り。故に暫くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち祈りとして叶かなわざる無く、罪として滅せざる無く、福として来たらざる無く、理として顕われざる無きなり」と示されるように、御本尊様に強盛に祈るならば、叶わない祈りなどなく、また滅しない罪などなく、大功德を成就することができるのであります。私たちは、御本尊様に対する絶対の信心と、自行化他にわたる果敢な実践に取り組むことによって、どのような祈りも叶うことを確信しましょう。また本抄の御文中に、白鳥の恩をば黒鳥に報ずべし。聖僧の恩をば凡僧に報ずべしとありますが、白鳥とは聖僧、黒鳥とは凡僧のことで、これは聖僧である釈尊の法華經によって成仏を得た諸菩薩・人天・八部等が、その恩を凡僧である末法の法華經の行者に報ずることを譬えたものです。これは天台大師の弟子である章安大師が著した『觀心論疏』に説かれていた話です。

特に御文の 白鳥の恩をば黒鳥に報ずべしとの譬えについて、総本山第六十六世日達上人は、私達末法の衆生の報恩の在り方や修行の在り方を示される上から、大聖人様に限らず、われわれを導いて、この南無妙法蓮華經につかせてくれた人は皆白鳥である。その白鳥に対して自分は恩を報ずることは仲々できやしない（中略）どうして報じるかという、同じく自分もまた謗法の人びとに、この妙法蓮華經を下種し、折伏して、教化して始めて、その恩を報じることができるといふことなんです」達全一一一六二と御指南なされています。

すなわち、自分を折伏し正法に導いてくれた人 白鳥に対する報恩は、今度は自分が折伏をする立場となり、いまだこの正法を知らない人 黒鳥に、折伏を行することであると仰せなのです。

私達は日々、仏祖三宝尊から計り知れない広大な恩を受けています。されば、この仏恩に報いていくためにも、一人でも多くの人に一日でも早くこの正法を伝え、四恩報謝の実践者となっていくことが何よりも大切です。時を逃してはなりません。

謗法の害毒に苦しむ人々を救うため、さらに決意を新たに、折伏実践の行動を起こしてまいりましょう。私達は、御本仏大聖人の力強いお言葉に勇気を頂き、真剣なる唱題、力の限りの折伏、この実践を続けていくなれば、目の前の小さな悩みなどは雲散霧消し、必ずや誓願も成就していきます。講中皆が異体同心して、明るく元気に毎日の信心活動に取り組むことが肝要です。

御法主日如上人猊下は、大法一箇の大御本尊様を受持し、弘通する者は、ありとあ

らゆる仏、菩薩、二乗、諸天ならびにその眷属^{けんぞく}に守護せられること、間違いないのであります。それはひとえに、持^{たも}つところの法が最も勝れているが故であります。中略）この大御本尊様を受持信行する者は、大御本尊様の広大無辺なる功德と、あらゆる仏、菩薩、二乗、諸天等の守護が必ずあることを忘れずに、勇気を持って、いよいよ折伏に励んでいただきたい」大白法 八二五号）と仰せられています。

私たちは、大御本尊様の絶大なる功德と諸天善神等の守護を忘れることなく、身命^{しんみょう}を賭^として謗法の人々を救う慈悲の折伏を実践し、誓願を達成していきましょう。

そして、一人でも多くの人々に、たとえ一文一句なりとも、末法の御本仏日蓮大聖人様の正しい教えを伝え、下種折伏していくことがいかに大切なことであるかを知り、お互いが声を掛け合い、励まし合い、世界中のすべての人の幸せを願い、広宣流布を目指してたくましく前進していくことが大事であります。大日蓮・令和六年九月号）との御指南であります。

特に此の九月は、折伏強化月間の最中です。折伏は、法華講員一人ひとりの実践行です。まず御自身が、折伏相手に電話をかけてください、メールを送ってください、手紙を出してください。そして何よりも、直接お会いして話をする、これが一番です。

すでに支部から打ち出されている活動内容に沿って皆が実際に動く、まずは自分が動き出すことによって、周りも必ず変わっていきます。声を掛け合い励まし合って、講中一結して頑張りましょう。以上。

（令和七年九月度・御報恩御講の砌）